

翻訳と地域研究

押川典昭

これまで10冊の小説や伝記を翻訳出版してきたが、ふり返ってみると、時とともに翻訳の文体が明らかに変化しているのがわかる。変化のきっかけのひとつは、ワープロを使いはじめたことである。原稿用紙の升目をひとつひとつ埋めていく辛気臭い作業から解放され、どこから書き(訳し)はじめてもよい、文章の手直しが自在にできる、というワープロの特性のせいで、書くことに大胆になり、その結果として文体が変化したといったらいだろうか。むしろ、ワープロだけが文体の変化の理由ではない。これは誰もそうだろうが、年齢を重ねるにつれて文体は変わる。インドネシアの革命家タン・マラカの政治論や自伝を翻訳したころは、荒畑寒村の文章が好きで、その文体を無意識のうちに思い浮かべながら訳していたかもしれない。『平民社時代』のような、あの漢文調の文体に魅かれていたのだ。

その後、小説の翻訳をはじめると、モフタル・ルビスやプラムディア・アナンタ・トゥール、ユディスティラといった作家たちの文体にふさわしい(と思われる)日本語を考えるようになった。もうひとつ、小説の翻訳で求められるのは「説明」ではなく、「描写」であり、そのことを意識するようになった。それがどこまで成功したかはわからない。文章には、書き手の生理のようなものがこびりついていて、どんなに工夫をしても、結局、わたしはわたしの文体で書く(訳す)しかないという思いもある。ただ、「文章修業」というものがあるとすれば、わたしの場合、それは翻訳をつうじて行なわれたことだけは確かである。

ところで、地域研究に欠かせない現地語の習得では、「話す」「聞く」「読む」「書く」ことが求められるが、このなかで「読む」とはどういうことだろうか。一般には、例えば、インドネシア語やマレー語を読み(黙読し)、その意味をつかむということだろう。とくに大量の資料を読む場合には、できるだけ速く読むことが必要になる。それは確かにそうなのだが、わたしは「読む」という行為の意味のひとつに、「訳読」の効用とでもいうべきものを付け加えたい気がする。

ここでいう訳読とは、簡単にいえば、原文に込められたもの(それは文意だけにとどまらない)を過不足なくつかみとり、日本語に直すという作業である。いうまでもなく、ある文章を頭のなかで理解することと、それを日本語に直すということ(=翻訳)は、まったく別の作業である。翻訳ではつねに読者が想定される。その読者には、他者だけでなく、翻訳者自身も含まれる。読者を想定し、その読者に伝えることを意識しつつ原文を日本語に直すこと、それが訳読という意味である。わたしは、地域研究をこころざす人は学部や大学院のどこかの段階で、一回はこの訳読の作業を徹底してやってみるべきではないか、と思っている。

このことをわたしは一度、授業で実践してみたことがある。非常勤として出講していた東大駒場の「東

南アジア地域文化研究」という題目の演習で、訳読の作業を徹底してやってみることにしたのだ。受講者は、いまでは立派なインドネシア・マレーシア研究者として活躍している Y さん、N さん、K さん、M さん、H さん、I さん、S さんといった面々。テキストは、スカルノ時代に閣僚をつとめた中国系インドネシア人の回想録 (*Memoar Oei Tjoe Tat; Pembantu Presiden Soekarno, Hasta Mitra, 1995*)。まずは悪文の見本のような文章で書かれたものである。

この演習でわたしが求めたのは、以下のようなことである。分担した箇所をあらかじめ、読者を想定した日本語に直してくること。訳文は、細部に至るまで、原文に可能なかぎり忠実で、曖昧さを残さないこと。辞書を引く苦勞を厭わないこと。ただし、辞書で説明されている訳語をそのまま当てるのではなく、いったんそれから離れて、そのコンテキストでもっともふさわしい日本語を考えること。訳文は音読して、そのまま活字にして出版できるレベルにまで文章を彫琢すること。行間を読むこと。想像力を駆使すること(想像力は創造力の源)。

毎回、それぞれが用意した訳文をめぐる丁々発止の議論が行なわれ、所定の時間を大幅にこえて続けられることも再々だったが、ふり返って、この授業はわたしにとってもっとも充実感のあるものだったと思う。あれ以前にも以後にも、インドネシア語を読む授業で、そんな幸福な時間を過ごしたことはない。

文化人類学におけるフィールド調査などと違って、ある記述された資料にもとづいて研究を進める場合、わたしたちが依拠すべきものはその記述のなかにしかない。であれば、読むという行為にこだわりを持つべきであろう。訳読はそうしたこだわりの作業である。